

オックスプロ「パーソナル・クリップ」による花粉対策について

今夏(2010年)の気象影響によって、2011年に飛散する花粉量は例年より増えるとの予測です。

日本における花粉症患者数は約2,000万人(環境庁推計)。それは、全国民の約16%という割合を占めて、関連市場規模は1,500億円を超えているといわれています。この数字は、医薬品や医薬部外品を含める直接関連商品だけのもので、ビジネス全体を考えると、「花粉付着防止の家庭洗剤」や「付着した花粉を包み込んで無害化するスプレー剤」の他、例えば沖縄への「花粉脱出旅行」なども含めると、間接的効果の市場規模は相当な規模であろうと考えられます。

さて、花粉被害について意外なことは、実は原因となる花粉の暴露を屋外でも室内でも同様に受けてしまうということです。この点を理解せず、外出時だけ花粉対策を行ってしまつて重症化しているケースが懸念されています。

■ 96%の人が「室内でも花粉に悩んでいる」

現在、成人の5人に1人は花粉などによるアレルギー症状に悩んでいると言われています。花粉に悩む人は、外出時にはマスクや眼鏡を着用して、花粉を吸い込んだり目に入ったりしないように予防をしています。外出時に花粉に悩む人で、「室内でも花粉に悩んでいる」と答えた人は96%にもものぼります(2004年アンケート)。しかし、意外と室内での花粉対策が図られていない現状が問題となっています。

■ 室内の花の多くは、外出時の“衣類”と屋外に干した“洗濯物”、そして“換気扇の誘引”によって持ち込まれる

屋外では、空間が広いことや絶えず風が吹いていることなどもあって、実は花粉に暴露する程度に限られているとも考えられますが、逆に安全だと考えられがちな室内には、“衣類”や“洗濯物”以外にも、キッチンやバスルーム、トイレなどの換気扇に誘引されて外から侵入する花粉が多く、室内でも確実に花粉の暴露を受けています。

また、このように外部から室内に持ち込まれる花粉は食い止めようがありません。

必ず何らかの解決手段を講じなければいけません。

■ 室内の花の対策は、「できるだけ花粉を持ち込まない」そして「花粉を破裂させない」がキーワード

スギ花粉は、鼻の粘膜などに接触すると花粉の表面の膜が破裂し、その中からアレルギーが放出され、鼻水やくしゃみなどを引き起こすことが知られています。

従って室内の花の対策は、「できるだけ花粉を持ち込まない」と同時に、「花粉を破裂させない」ことが重要

■ 二酸化塩素で“花粉を変性させ賦活化させる”“破裂もさせない”

今までの花粉対策商品は、鼻・ノド・目などの粘膜に花粉が付着した後のアレルギー症状を緩和させたり、特殊な溶剤を使って花粉を包み込んでしまうなど、直接花粉のアレルゲン(抗原)に働きかけて無害化するという働きの商品はありませんでした。

最近になって、塩素系除菌剤などに花粉のアレルゲン(抗原)を変性させるなどの機能が認められてきましたが、それらの仕様はスプレーだったり固定設置するゲル剤だったりして、人の移動に合わせてオールタイムで機能することができませんでした。その結果、抑制効果のある場所とそうでない場所のムラが出来てしまうことから、いつでもどの場所でも効果を得ることが出来る、オールタイムで機能する製品の開発が期待されてきました。

■ 人の移動に合わせてオールタイムで機能する “オックスプロ パーソナルクリップ”の開発

コーベジオケミア(株)では、09年7月より二酸化塩素の機能研究と用途開発に着手し、当初は“マスクを着用できない職業や身体的理由の方”にインフルエンザ対策のマスクの代わりに使っていただく『エアー・マスク』の開発を進めていました。

その研究開発の中で、二酸化塩素がインフルエンザウイルスを抑制するメカニズム(酸化変性)が、そのまま花粉にも応用できるのではないかと仮説を立てて、2010年春よりボランティアの方に実際に試験使用していただいた結果、多くの方から「改善の体感が得られた」との報告を受けました。

また、第三者評価機関(東京環境アレルギー研究所)での実証試験では、『抗原濃度減少率が91.8%であった』との報告を得ています。

花粉は、アレルゲン物質を多糖類のペクチンとたんぱく質からなる膜で包んだ構造をしていて、ちょうどウイルスが生体と反応する核酸をたんぱく質の膜が包んでいる構造に似ています。この共通した構造に対して二酸化塩素が働いて、ウイルスや花粉アレルゲンが私たちと接触できなくさせます。

■ 今夏は9月以降の残暑まで厳しいとの気象庁予報です。 そのため来春はスギやヒノキ花粉が激増する可能性があるため、 しっかりとした花粉対策が求められます。

“オックスプロ パーソナルクリップ”は、胸元近くに手軽にクリップ装着するだけで、人の移動に関係なくどこに居ても周辺の呼吸空間に侵入するウイルスや花粉などの原因物質を賦活化します。外出時はむろんのこと、オフィスなど屋内においても効果が期待できます。特に花粉は外出時の衣服や取り入れた洗濯物に付着して室内に侵入する他、換気扇の誘引によっても侵入します。つまり、玄関、キッチン、リビング、トイレ、風呂場、寝室まで住まいのあらゆるところに侵入していると考えられ、“オックスプロ パーソナルクリップ”であれば、これらすべての生活空間で機能を発揮できる唯一の対策商品です。

■ 花粉症治療の問題点 「花粉治療に代わるべき対策」

1. 注射による治療

花粉症を治療する注射療法では、副腎皮質ホルモン(筋肉内注射)、減感作療法、ヒスタミン添加免疫グロブリン(筋肉内注射)、星状神経節ブロック(首に麻酔薬を注射)、などが主です。

▼ 中でもすぐに治ると言われるのは、副腎皮質ホルモンの筋肉内注射ですが、この副腎皮質ホルモンの筋肉内注射は、もっとも副作用が大きく、特に糖尿病、気管支喘息、アトピー性皮膚炎、結核、胃潰瘍、妊娠などが合併する場合は、病気が悪化することや、副腎皮質ホルモンからの離脱が難しくなる場合もあり、使用には十分な医師との相談が必要です。ステロイドは確かに花粉症に効くかと思えます。免疫を下げて異物との認識をさせないようにするもので、結果的に花粉症だけでなく他の感染症の危険が増えることとなります。他が重症化しては意味が無いので避けるべきと思えます。

▼ 減感作療法とは、自分の花粉症のアレルゲンのエキスを注射して、花粉に対する免疫を作りアレルギーの症状が軽くなるようにします。しかし治療には長期間を要し、患者本人と医者との二人三脚で努力を積み重ねても、必ずしも効果が現れるとは限りません。かなり根気のいる治療法ですが、食物やダニ(ハウスダスト)アレルギーなど1年中アレルギーが続くなどの方に向いていると言われていています。花粉症であれば、大体3年間くらいかけて、症状の無い季節にも一年中、毎週注射に通います。

▼ ヒスタミン添加免疫グロブリン(ヒスタグロビン)注射はシーズン中に3~4回注射します。効果は速やかで一見楽そうですが、ヒスタグロビンは他人の血で作られている血液製剤で、たとえ加熱製剤であっても、将来まだ発見されていないウイルスやその他の病気に感染する可能性は否定できません。

▼ 星状神経節ブロック注射は、首の付け根にあるに麻酔注射し、自律神経の交感神経を抑え、副交感神経を優位にさせます。その結果、花粉症症状が和らぎます。この注射での副作用は、毎回の局所麻酔剤による中毒とアレルギーが起こる可能性があります。これはごく少数です。星状神経節ブロック注射の効果持続が3-4日のため、症状が改善して安定するまで、かなりの回数にわたって治療が必要です。また、完治させる治療ではなく一時的にバランスを図る治療ですので、翌年にも治療の必要があることと、治療回数が多いため費用も相応に必要となります。

2. 薬物療法

花粉症に対する治療の中心は、注射療法より薬物療法です。大きく分けると、花粉症の症状を和らげるための「対症療法」と、症状が現れないようにする「予防的治療」があります。仕事などで忙しいと、症状がひどくならないと病院に行かないケースも多く、最近では症状が出る前に抗アレルギー薬を服用する「予防的治療」が増えてきています。しかし、ほとんどの薬物には、当たり前のように相応の副作用があります。以下に良く使われる薬物の特長と副作用をまとめてみました。

▼ 抗アレルギー薬

一番使われている薬で、肥満細胞の中でヒスタミンなどの化学伝達物質が作られるのを阻害したり、またできてしまったヒスタミンが肥満細胞から放出されるのを阻害します。それでもヒスタミンが出てきた場合、ヒスタミンが末梢神経に近づくのを防ぐ働きもあります。

抗アレルギー薬が花粉症対策の一番の薬に挙げられている理由は、長期間服用した場合の副作用として胃腸・肝障害などが起こることもありますが、花粉症治療に限定すれば、摂取期間が長くても3~4カ月の期間限定の服用なので、副作用が比較的少なくいためと言われています。

▼ 抗ヒスタミン薬

くしゃみ、鼻水、かゆみのひどい時に用いられます。速効性がありますが、鼻づまりと重度の症状にはあまり効果が期待できないと言われています。

一般的な副作用として、ボーっとしたり、とても眠くなる、ダルい、口が渇く、胃腸の具合が悪くなるなどがあり、特に車の運転や危険な作業をする人、また肝臓疾患や心臓疾患がある人、前立腺肥大の人、緑内障、ドライアイの人などは、使用に際して注意が必要です。

▼ ステロイド剤

他の薬ではどうしても治まらない場合の対症療法の最終兵器です。激しい花粉症でも劇的に症状を抑えます。くしゃみ、鼻水などの他、アレルギー全般の症状を抑えることができ、特に炎症を抑える力が強いので、一番治りにくい鼻づまりに効きます。しかし、さまざまな重い副作用があり、最もリスクが高い薬剤です。

ステロイド剤は、短期間で少量であれば副作用も低く、それゆえに医師からも多く処方されていますが、使用期間が長くなり量が増えてくると副作用が起こります。主な副作用は、胃腸障害、顔などのむくみ、高血圧・心不全・糖尿病などの生活習慣病の悪化、皮膚・髪の毛などが弱くなるなどです。そして、効果が高いだけに依存的に使い続けて副作用が悪化する場合もあり、必ず短期・少量を守って使われるべき薬剤です。

▼ 漢方薬

漢方は「副作用がない」と思われがちですが、漢方薬も選び方や使い方に注意が必要です。風邪などで処方されることの多い「小柴胡湯」などは、肝臓疾患の患者に肝機能改善の目的で投与されたところ、死亡 8 例をふくむ、肺炎に至るきわめて重い副作用を起こしています。

「漢方を使ってみようかな…」と思ったら、「漢方なら副作用は、まったくない」などという宣伝だけで押し通す薬局や医師には十分注意し、ちゃんと処方を選ぶことができ、相談ができる専門家をよく見きわめることが大切です。

■ “オックスプロ パーソナル・クリップ”は、病院に通院する時間の問題／毎日薬を飲む手間の問題／心配な副作用の問題／それら全ての毎年の費用が大きい・・・などの多くの現状問題に今までになかった新しい改善を提案します。“オックスプロ パーソナル・クリップ”の花粉対策への働きと詳細は、別資料『2011 花粉飛散量とオックスプロ・パーソナル』を参考にご覧下さい。

2010. 07. 30

KobeBioChemia.Inc.

コーベビオケミア(株)